



## 熱の持たせ方

教材に対する熱（意欲）をどれだけ維持しながら学習にとりくみ、すすめられるか。低学年では、生活経験をもとに意欲を引き出していくことが鍵となる。今回の授業では「かくれんぼ」という題名から想起できることを伝え合い、子どもと身近な「先生」を例としてあげ教材への抵抗感をなくすなど、わくわくするような工夫があった。

子どもが「次の時間どうするんやろう」「どうなっていくんやろう」と感じる時間が、「問い」に向かう気持ちに育っていく。主体的に学びに向かう姿勢の地盤は、低学年から耕していくことが重要である。

## 教材の特性

どの教材にも、表に出る特性と隠れている特性がある。表の特性は「事例の順序」「題名」「初め-中-終わりの構造」「比較」など、教材を読んですぐに分かる個性をさす。隠れている特性は、教材を通してつかむことができるものである。「かくれんぼ」は、誰が誰から隠れているのか。鬼に見つからないように隠れているのである。では海の生き物にとっての鬼は何なのか。そうして書かれていることから、書かれていないことを想像するための仕掛けが、教材の中には散りばめられているのである。

## 板書

板書には1時間の学習の流れを記したり、子どもの発言をまとめる掲示板としての機能があったりと、様々な役割がある。話し合い活動をしていて、子どもの発言が話題から逸れてしまった場合、**キーワード**を板書しておくことで、それがアンカーとなって話題をもどし、主題に迫ることができる。

## 子どもたちが問いを持つ

### 状況のデザイン

教材読みをしていると、言葉の意味が分からず、学習から気持ちが離れてしまう子どももいる。大まかに読んで心に残ったことから学習につなげるなど、特に初読の際には、「分かんベース」を意識して指導に向きたい。

大事なのは子どもたちが問いを持つことではなく、問いに向かう気持ちへ導くことである。そのためにはどうすれば良いのか、教師は日々研鑽を重ねる必要がある。